慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	資料発掘と斯道文庫
Sub Title	Excavation of texts and Shidô-bunko (Keio Institute of Oriental Classics)
Author	佐藤, 道生(Satō, Michio)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2020
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.55 (2020.) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設六十年記念フォーラム「書誌学のこれまでとこれから」〜講演録 挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20200000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料発掘と斯道文庫

佐藤　道生

はじめに

ただ今御紹介に与りました佐藤です。今日の講演会・研究発表会のテーマは「書誌学のこれまでとこれから」ということで、恐らく私にはこれまでの斯道文庫の活動について話せ、ということだと思います。ただこれまでの斯道文庫と言っても、慶応の附属研究所になってからでも六十年の歴史があります。文庫に在籍した教員もかなりの数に上ります。そこで今回は、私が学生時代に、特に影響を受けた二人の先生、阿部隆一先生と太田次男（つぎお）先生のお仕事を通して、斯道文庫のこれまでの研究活動についてお話ししたいと思います。今日は、私の後の四本の研究発表が中心ですから、私はいわば前座です。気楽にお聞き下さい。とりとめの無い、雑然とした話になると思いますので、その点は前もってお詫びしておきます。

私が慶応大学の文学部の国文学専攻の二年に上がって三田キャンパスに来たのは昭和五十二年、一九七七年四月の

ことです。その前の年の十月まで斯道文庫長は文学部国文学専攻の森武之助教授が兼務されていて、そのあとが国史の中井信彦教授。一九七八年十月に阿部隆一先生が文庫長に就任されました。

国文学専攻の森武之助先生は一九七七年三月に定年退職されたので、私は教わったことはありませんが、慶応を退かれた後、鶴見大学に移られたので、鶴見でお目に掛かったことがあります。旧旗本の家柄の出とかで、戦時中、鼻紙がないので、寛永版の『吾妻鏡』をバラして鼻をかんでいたとか、そんな逸話が残っている先生です。それから、森先生が子供の頃、お宅の隣に作家の泉鏡花が住んでいたとかで、小学生の森少年は鏡花のところへ揮毫してもらいに行ったんだそうです。鏡花は差し出された扇面を手に取ってじっと見入って、「これにはキツネが憑いています」と言って揮毫を断った、そんな話を聞いたことがあります。これは書誌学と全然関係ありませんね。失礼しました。

私のような学部生にとって斯道文庫がどのような研究をしている所なのか、そんなことは当時、全く分かりませんでした。ただ、斯道文庫の先生が担当している授業科目が幾つかありましたので、私はそれらを履修しました。その内の二つが阿部先生の「書誌学」という科目と太田先生の「国文学Ⅲ」という科目です。

この二つの授業には毎回欠かさず出席しました。大学の授業にそれほど熱心でもなかった私がどうして毎回出席したのか、それは授業中にされる二人の先生の雑談がとても面白かったからです。阿部先生は講義の合間に、太田先生は講義を始める前に、ちょっとした学問の香りのする話をされる、それを毎週楽しみにしていました。

阿部隆一先生の研究活動

これからしばらく阿部先生の話をしたいと思いますが、これが阿部隆一先生の写真ですね。

阿部先生の書誌学という授業、これは水曜日の四時限目に西校舎の教室で行なわれていました。履修者の中には、後に金沢文庫に入る西岡芳文さんがいました。この書誌学という授業を履修し終えると、翌年度は、目録実習の授業を取ることが許されます。斯道文庫の閲覧室に場所を移して、実際に古い書籍を手に取って目録を取るという授業です。当時の斯道文庫は、旧図書館の地下にありました。今は旧図書館と言っていますが、当時図書館はそれだけで、まだ今の図書館は建っていません。斯道文庫はその地下にありました。陽の光のあまり入らないところで、暗いイメージがあったので、「穴蔵」などと揶揄する学生もいました。今の斯道文庫の置かれている環境とは大違いですね。「目録を取る」というのは、割り当てられた書籍（これは当時助手だった大沼晴暉先生が適当に割り振って下さった書籍です。江戸時代の版本が多かったのですが）、その書誌的事項を調べ上げて、1枚のカードにまとめる作業のことです。この授業は時間割の上では水曜日の五時限目となっていますが、履修者は各自授業の初めに目録カードを取り、それが出来上がったところで阿部先生がそれを丁寧に手直しするという手順で行なわれるので、授業が終わるのはいつも夜の八時を回ってしまいます。もうお腹がペコペコなので、私はもちろん、履修者の何人かは阿部先生の後にくっついて行って、仲通りにある「三田スナック」という食堂、年配の御

阿部隆一先生

夫婦がやっている食堂、おじさんが料理を作って、おばさんがお給仕をしてくれるスタイルの食堂で、夕飯を食べる。この店は、今はもうありませんが、阿部先生の行きつけでした。先生は下戸ですから、ビールで喉を潤すなんてことはしない。先生の話を聞きながら、その日の定食を食べて、九時過ぎにお開きになります。

そういった授業外で先生が話される話や授業中の話を聞くうちに、斯道文庫の活動というものがどういうものであるか、だんだん私にも分かってきました。耳学問ですね、これは。

阿部先生は書誌学の授業の中で、書誌学者は「足で稼ぐ」という話をよくされました。書物の原本を見る。千里を遠しとせず、原本を見に行く、いかなる障壁があろうとも現物に当たるということです。皆さん、そんなこと当たり前ではないかとおっしゃるかもしれないが、これは「言うは易し、行なうは難し」です。今、書誌学研究を標榜している中にも、原本を見ることをあきらめて影印版やデジタル画像で済ませている例が間々見受けられます。網羅的に伝本を見ることの難しさを感じます。

慶応の図書館に幸田文庫という、幸田成友先生の旧蔵書が入っています。幸田成友先生は露伴の弟に当たります。幸田先生は通信教育部の『書誌学』という教科書を書かれていますが、それは全て御自分の蔵書を使って書かれたくらいですから、幸田文庫は貴重書の宝庫と言って良い文庫です。これは阿部先生が交渉に当たって寄贈を受けることになったと聞いています。寄贈に当たっては、幸田先生と、そのときまだ三十半ばの阿部先生との間で、蔵書一点ごとに議論が交わされたそうです。ときには議論が対立することがある。すると、阿部先生は一旦引き下がって、すぐさま自説を補強するために関連の資料をさまざまなところに閲覧しに行く。これが「足で稼ぐ」です。病床にあった幸田先生はそれが出来ない。阿部先生の報告を聞きながら、幸田先生はとても悔しそうな顔をされたそうです。

阿部先生が書誌学研究を遂行する上で重視されていた事柄を、私なりにまとめてみますと、次のようになります。これは飽くまでも私一個人の推測です。そして、もちろん研究能力のあることが前提です。

1、研究者間の人脈

2、古書店との関係

3、図書購入資金

この三つです。1の研究者間の人脈は、他の研究者との間に築き上げた良好な人間関係のことです。これは情報交換という観点だけではありません。時には閲覧の便宜を図ってもらう点でも大いに役立ちます。また、阿部先生は五十代以降、中国・台湾にも足を伸ばして調査に当たられていましたから、中国人研究者、図書館関係者との交流を重視されました。学部の書誌学の授業の中で、「これからは中国語が出来なければダメだ」というようなことを仰っていたことは印象的です。教室のいちばん前に坐っていた私の同級生を相手にして、簡単な発音練習をすることもありました。阿部先生の最後の門人である髙橋智さんは先生の教えを実践して、中国にネットワークを張りめぐらし、大きな研究を成し遂げています。これは皆さん、よく御存じのことと思います。

さきほど先生行きつけの三田スナックの話をしましたが、その三田スナックで先生から伺った話ですが、先生のお住まいだった鎌倉に芸林荘という古書店がありました。今はもうありませんが、当時芸林荘で経切（きょうぎれ）、古写経を短冊状に切ったものを一枚何百円かで売っていたそうで、海外出張するときにはそれを何枚も買って、お土産に持って行くと先方の研究者に喜ばれるとのことでした。書籍に挟むしおりに使うわけです。

2の古書店との関係は、意外に思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、斯道文庫は国書・漢籍の書誌学研究

を進めると同時に、現在でも、幾つかの柱を立てて、体系的な蔵書構築を図っています。特に阿部先生の時代には中国・朝鮮・日本に亙る漢籍の古写本・古刊本をたくさん購入しました。これは今では図書館と斯道文庫の財産と言って良い物です。これらは全て日本人が漢学、つまり中国の学問を学ぶために利用した、その原本です。これを「日本漢籍」と我々は呼んでいますが、阿部先生はその体系的な蒐書を計画していました。

阿部先生は、古書店の販売目録に目を通すことは言うまでもありませんが、これも「足で稼ぐ」ことを実践し、古書店や蔵書家を訪ねることもしばしばでした。新出資料は古書店が仲介するものですから、特に古書店との間に親密な関係を築くことが重要です。阿部先生は他のどの研究者よりもその点に気を遣っていたと思います。

また、図書購入には先立つものが必要ですから、斯道文庫では賛助員会という組織を作るなどして、図書購入資金を捻出しました。このあたりのことは、太田臨一郎さんの随筆を読むとよく分かります。次に掲げるのは『阿部隆一遺稿集』第一巻（一九九三年一月、汲古書院）所収の「阿部書誌学の開拓」と題する太田さんの文章の一部です。太田臨一郎さんは、先に述べました幸田先生の旧蔵書を、阿部先生といっしょに慶応の図書館で整理に当たられた方です。その当時を回想して、次のように書いています。

幸田文庫は、成友先生御存世中に、時々参上して一部譲渡を受けていたが、没後、嗣子成一氏から文庫を挙げて寄贈せられることになり、阿部君や、吉田小五郎君の推挙であろう、私が招ばれてその受け入れ、整理に当たることになり、しばらく阿部君と席を並べた。……二人共、固い本ばかり見て疲れると、古本屋パトロールをしようと、抜け出して、弘文荘や、一誠堂を訪れ、主人の私室に通されて新収の古書を見せて貰った。時には一誠

堂の主人に「酒井さんは余り固すぎる。長生きしようと思ったら、遊んで妾でも持ちなさい」と飛んでもないことをすすめ、「阿部先生には適いませんね」といわれたが、親しみは増した。……年度末で予算がないときは、立替えてくれるスポンサーを見付けて、購入した本はその月末には支払することにしていたので、他の大学の注文とカチ合ったときも、慶応さんの方に廻しますといった店も多かった。

これを読みますと、阿部先生が古書店との良好な関係を保つことによって、資料収集に努めていたさまが浮かび上がります。ここに出てくる一誠堂の主人は先代の酒井宇吉さんのことです。二十年以上前のことですけれども、私もしばしば一誠堂に上がり込んで、酒井宇吉さんと雑談を楽しむ機会がありました。その中で、話が阿部先生に及ぶこともありましたが、酒井さんが阿部先生の人柄に心底惚れ込んでいたことが実によくわかりました。阿部先生は鎌倉の浄明寺にお住まいでしたが、酒井さんは阿部先生の勧めでその近くに土地を買っていまして、引退後はそこに、阿部先生の御近所に住むつもりだったそうです。その計画も阿部先生が早く亡くなられたことで、潰えてしまいました。現在の一誠堂のあるじは、その息子さんの健彦さんですが、健彦さんは慶応の国文を卒業後、斯道文庫の研究嘱託となり、阿部先生が台湾に訪書されたときには、同行して調査の手伝いをされました。その台湾出張のことは、私は健彦さんから直接伺ったことがあります。いろいろと面白い事件があったそうですが、本題から外れますので、割愛します。

この一文を草した太田臨一郎さんは、軍服などの服飾研究家として著名な方ですが、古書についても造形が深く、『古書展覚書』（一九七二年五月、日本古書通信社）、『〈文献随筆〉雑誌散策』（一九八七年十月、日本古書通信社）な

どの著書があります。ともに「こつう豆本」のシリーズの一冊です。斯道文庫には、常にその外縁に文庫の支援者とでも言うべき人々がいますが、阿部先生の時代には、この太田臨一郎さんや一誠堂の酒井宇吉さんが斯道文庫の支援者だったわけです。こういった人々は阿部先生にとって、とても心強い存在だったと思われます。

今日、私の講演題目を「資料発掘と斯道文庫」としましたのは、もちろん斯道文庫が行なっている書籍ごとの網羅的伝本調査、或いは所蔵機関ごとの悉皆調査の中から、貴重な資料が発掘された、未知の資料が出て来たということも念頭に置いているのですが、実はそれよりもむしろ、阿部先生を始めとする文庫員の方々が、その鑑識眼によって見出し、古書店から購入した新出資料が極めて多かったことを言いたいがために付けた題目です。新出資料が公開されることによって、研究は大きく進展します。新たな段階に歩みを進めることができます。そういった資料発掘を積極的に行なうことが、斯道文庫の大きな活動の一つであったと言えます。資料の購入とその研究とが密接に結びついていること、この点が斯道文庫の研究の一つの特徴です。実例を一つ挙げてみます。

日本漢学史を考察する上で、最も重要な資料を提供してくれるのが金沢文庫本であることは、研究者ならば誰しも認めるところです。それゆえ阿部先生も金沢文庫本を博捜し、それに関する研究成果を数多く発表されました。また、後で触れますけれども、太田次男先生も『白氏文集』の旧鈔本研究の一環として、金沢文庫本を熱心に追いかけられました。お二人は別々に金沢文庫本研究に従事されましたが、結果的には互いに補完し合うようなかたちで大きな成果を上げられました。これは非常に面白いことだと思いますが、まず阿部先生の研究を挙げたいと思います。『阿部隆一遺稿集』第二巻（一九八五年一月、汲古書院）に「金沢文庫本「施氏七書講義」残巻について」と題する論文（初出は『金沢文庫研究』第一六六号、一九七〇年二月）が収められています。

この論文では、兵家の書と言えば、ふつう『孫子』などが有名であるが、日本では平安時代以来、主として講読されたのは『六韜』と『三略』とであり、それらは『施氏七書講義』によって学習されたことをまず明らかにしています。この『施氏七書講義』は宋の施子美による七書の注釈書ですが、不思議なことに中国本土では普及した形跡がなく、中国には現存していません。しかし、日本では江戸時代に古活字版、或いは寛永十一年の整版、下って文久三年の官板とこれが広く流通していました。つまり『施氏七書講義』は中国では早くに散佚し日本にのみ現存する、いわゆる佚存書です。この『施氏七書講義』が鎌倉中期にはすでに日本に将来していたことを証明するのが金沢文庫本の存在です。論文から抜き出した部分を読んでみますと、「古く文庫外に流出していた金沢文庫旧蔵「施氏七書講義」残巻の所在を博捜して、世に紹介されたのは、前金沢文庫長故関靖博士であった」として、次の四点の写本を挙げています。

（一）彰考館文庫蔵「施氏問対講義」巻第四十　二帖（第二類第一号文庫印を鈐す）
（二）永井凞八氏旧蔵東京国立博物館蔵「施氏孫子講義」巻第九　一軸（第二類第一号印）
（三）中島徳太郎氏蔵「施氏孫子講義」存巻第十尾一葉（第二類第一号印）
（四）内野皎亭氏蔵「施氏尉繚子講義」存巻第廿六残巻一軸（転写）

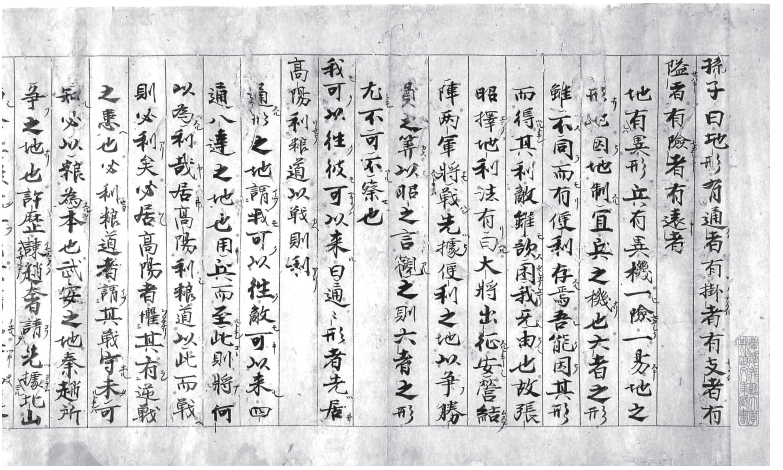
この内の（二）と（三）は行方知れずで、阿部先生は見ていません。（四）は金沢文庫本を転写したもので、これはいま天理図書館に入っているものです。阿部先生は（一）と（四）とを付き合わせることによって、次のような結論を導いています。「金沢文庫本「施氏七書講義」は建治二年（一二七六）頃北条実時が息顕時をして平政連所持本

を以て書写せしめたことが明らかとなる。恐らくもとは四十二巻完具していたものであろう」とこういうふうに言っています。ここに「平政連」の名前が出て来ますが、これは実時・顕時とは時代が合いません。この点は修正する必要があります。その先ですが、「関博士がつきとめられた金沢文庫本「施氏七書講義」の零本は以上である。……最後に筆者が新に発見した金沢文庫本「七書講義」の零巻を紹介し、新出の喜びを江湖に頒ち度いと思う」とされまして、次にどのような経緯でこれを入手したのかが書かれています。

七、八年前であろうか、大阪の古書入札会の目録に「孫子零本古写本一巻」とあるのを見て、孫子の旧鈔本は珍しいので、注文し、幸に筆者が職を奉ずる慶応義塾大学附属研究所斯道文庫の蔵に帰するを得た。この本が到着して、巻を開くと同時に、筆者は驚喜せざるを得なかった。その筆蹟書体は正しく嘗て見た彰考館蔵金沢文庫旧蔵「七書講義」と同じではないか。直にその写真と比較するに、まぎれもない。寸法行款、また紙背に杜牧注の書入を有する点も経籍訪古志・関博士著録の施氏孫子講義の零本とも符を合している。

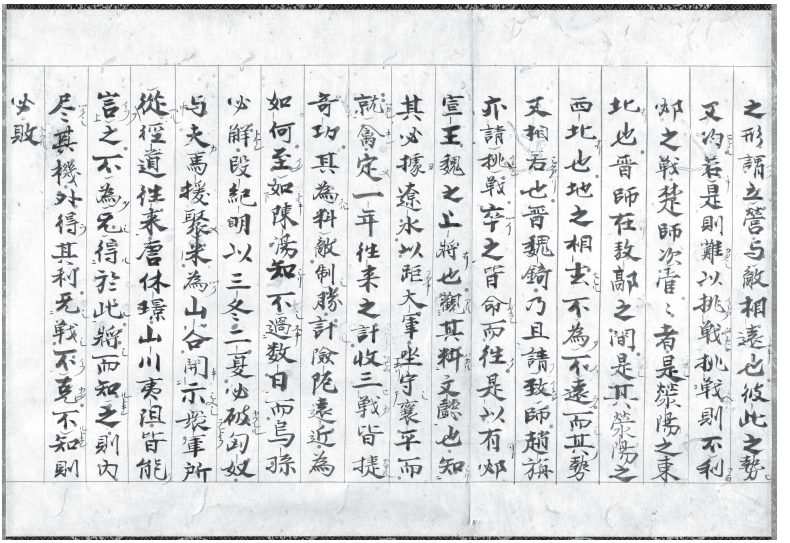
とこう述べています。このとき発掘した新出の『施氏七書講義』残巻が書影1です。全部で三十八行あります。

この北条顕時写本にはヲコト点と傍訓とが付されています。恐らく当時鎌倉に下っていた清原家の儒者の訓説に従ったものと思われますが、この訓点も貴重な資料です。寛永十一年の整版に付された訓点と比較することによって、いろいろなことが分かると思います。阿部先生はこの論文と同じ時期に「三略源流考附三略校勘記・擬定黄石公記佚文集」と題する論文（『斯道文庫論集』第八輯、一九七〇年十二月）を発表されています。これらの論文は、日本に於



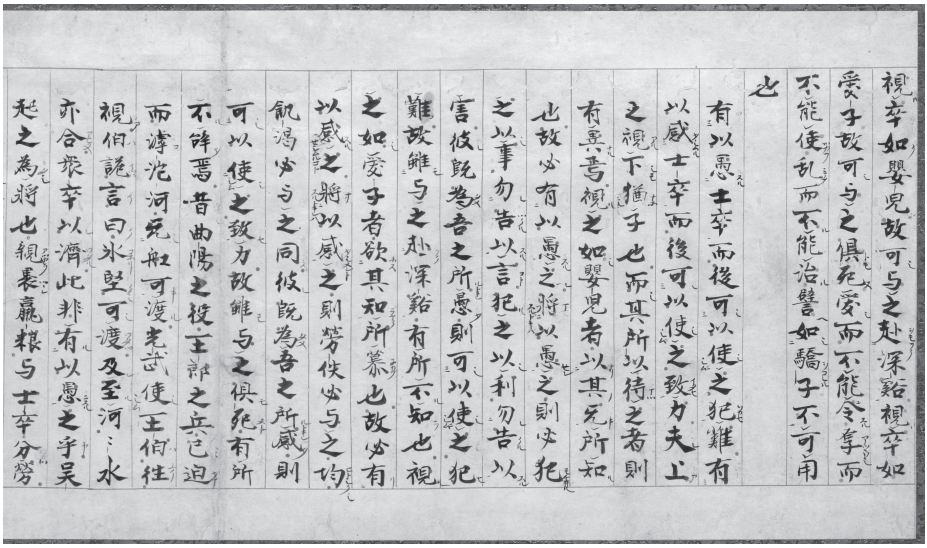
孫子曰地形有通者有掛者有支者有隘者有險者有遠者
地有異形兵有異機一險一易地之形必因地制宜兵之機也大者之形雖不同而有便利存焉者能因其形而得其利敵雖欲困我无由也故張昭擇地利法有曰大將出征安營結陣兩軍將戰先據便利之地以爭勝負之筭以昭之言觀之則六者之形尤不可不察也
我可以往彼可以來曰通〻形者先居高陽利糧道以戰則利
通形之地謂我可以往敵可以來四通八達之地也用兵而至此則將何以為利哉姑高陽利糧道以此而戰則必利矣必姑高陽者懼其有逆戰之患也必利糧道者謂其戰守未可知必以糧為本也武安之地秦趙所爭之地也許歷漢趙者謂先據北山

書影１　『施氏七書講義』巻十残巻 斯道文庫蔵本



之形謂立營与敵相遠也彼此之勢
又況若是則難以挑戰挑戰則不利
邲之戰楚師次管〻者是滎陽之東
北也晉師在敖鄗之間是其滎陽之
西北也地之相去不為不遠而其勢
又相若也晉魏錡乃且請致師趙旃
亦請挑戰卒之皆命而往是以有邲
宣王魏之上將也觀其料文懿也知
其必據遼水以距大軍坐守襄平而
就禽定一年往來之計收三戰皆捷
奇功其為料敵制勝計險陀表近為
如何至如陳湯知不過數日而烏孫
必解段紀明以三冬三夏必破匈奴
与夫馬援聚米為山谷開示衆軍所
從徑道往來唐休璟山川夷阻皆能
言之不為无得於此將而知之則內
尽其機外得其利无戰不克不知則
必敗

書影２　『施氏七書講義』巻十断簡 佐藤架蔵本①

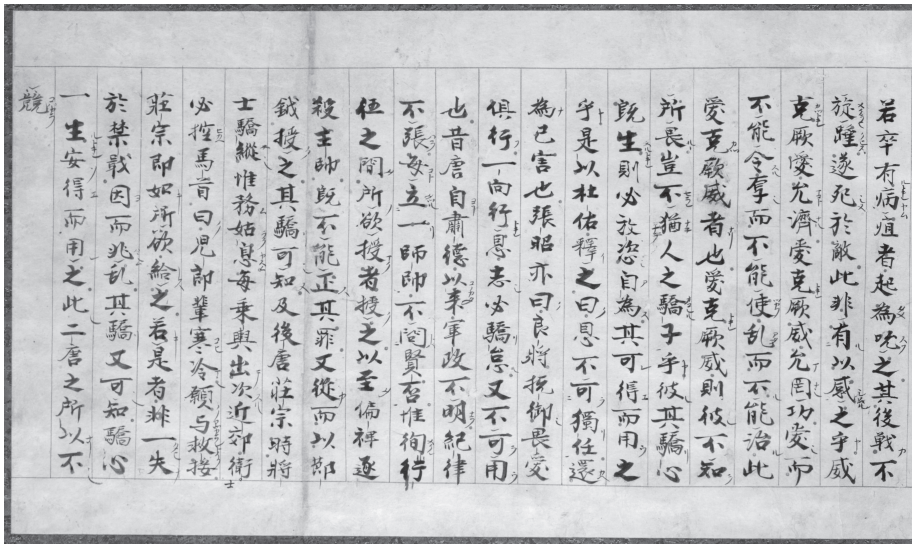


書影３　『施氏七書講義』巻十断簡 佐藤架蔵本②（右頁・左頁）

ける兵書の本文研究、兵書の受容研究に対して極めて重要な指針を示したものでして、後進の研究者に対して大きな影響を与えた研究であったと言えます。

以上、阿部先生が新出資料を発掘し、それをどのように研究に生かしたかということの一端をお話ししましたが、実は、これには後日談があります。阿部先生の論文が発表されてから四十年近く経った二〇〇七年十月のことですが、私は大阪の古美術商のホームページに掲載されている商品の中に、この金沢文庫本のツレを見付けます。当時、私は大燈国師、大徳寺の開山である宗峰妙超を伝称筆者とする「佐保切」と称する古筆切に関心を持っていまして、そのホームページの商品名に「伝大燈国師筆兵書切」とあったことから、これを購入したわけです。それが書影２です。

恥ずかしいことに、最初私はこれが『施氏七書講義』の金沢文庫本であることに気づきませんでした。手元に届いた古筆切の軸物を脳天気にぶら下げて、斯道文庫に行きまして、ちょうど文庫にいた髙橋智さん（今中国文学専攻の


若卒有病疽者起為吮之其後戰不
旋踵遂死於敵此非有以感之乎威
克厥愛允濟愛克厥威允罔功愛而
不能令厚而不能使乱而不能治此
愛克厥威者也愛克厥威則彼不知
所長豈不猶人之驕子乎彼其驕心
既生則必放恣自為其可得而用之
乎是以杜佑釋之曰息不可獨任還
為己害也張昭亦曰良將抚御畏愛
俱行一向行恩者必驕怠又不可用
也昔唐自肅德以來軍政不明紀律
不張安立一師帥不問賢否惟徇行
征之間所欲授者授之以至偏裨逐
殺主帥既不能正其罪又從而以節
鉞授之其驕可知及後唐莊宗時將
士驕縱惟務姑息每乘輿出次近郊衛
必控馬首曰兒郎輩寒冷頻与赦授
莊宗即如所欲給之若是者非一失
於禁戰因而兆乱其驕又可知驕心
一生安得而用之此二唐之所以不
競

教授ですが、当時は斯道文庫の教授）に見せたところ、高橋さんの顔色が一瞬にして変わりました。斯道文庫にこのツレがあるということで早速書庫から出してきてくれて、両者比較して金沢文庫本と判明しました。「佐保切」について私は「「佐保切」追跡―大燈国師を伝称筆者とする書蹟に関する考察―」と題する論文（『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』第七号、二〇〇九年五月、臨済宗妙心寺派教化センター）に報告しましたので、御興味のある方は御覧下さい。

それから、阿部先生が論文の中で挙げた伝本の二番目、永井淵八氏旧蔵東京国立博物館蔵「施氏孫子講義」巻第九というのは、関氏がそのように記しているので、阿部先生は東京国立博物館に問い合わせたところ、博物館は所蔵していないとの回答を得たとあります。したがって阿部先生は論文の中で、「所蔵者（の永井氏）が博物館に鑑定を依頼し、暫く館に預けてあったのを、（関氏が）寄贈（されたもの）と思い違いされたのではあるまいか。筆者は残念

ながら未だその後の所在をつきとめられずにいる」（括弧内は講演者が補った）と述べています。

二〇一五年六月のことですが、先に私が『施氏七書講義』の断簡を購入した古美術商から連絡があり、「また同じ筆蹟の断簡を仕入れた。今度のものには東京国立博物館の預かり証が付いている」とのことでした。私はそれがてっきり行方知れずになっている『施氏七書講義』巻九に違いないと思い込み、大阪にすっ飛んで行きました。しかし、残念ながらそうではありませんで、前と同じく巻十の断簡でした。ただ、これは四十二行もありました（書影3）。

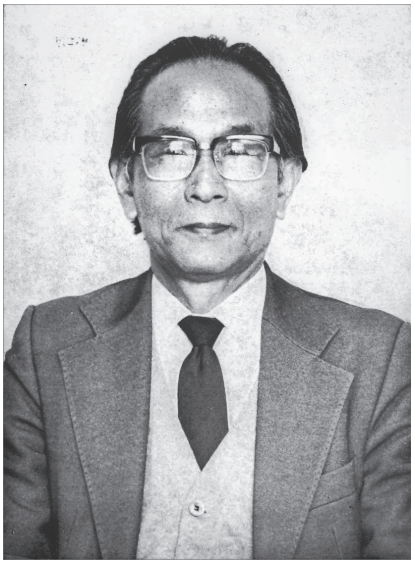
太田次男先生の研究活動

さて、太田次男先生の斯道文庫に於ける研究活動のことに話を進めたいと思います。これが太田先生の写真です。太田先生の学部の授業、国文学Ⅲはたしか木曜日の四時限目だったと思います。どういう授業かというと、『本朝文粋』に収められている作品をヲコト点にしたがって読むというものでした。教材は、先生手ずからガリ版刷りで作成したもので、黒と赤の二色刷。例えば菅原道真の「書斎記」とか、慶滋保胤の「池亭記」とかを一句づつ先生がヲコト点の読み方を説明しながら読んでゆく。読み終わったら、今度は学生に宛てて読ませる、という授業でした。学部の二年とか三年とかで、ヲコト点がすらすら読めるようになるというのは、今から思えば大変なことです。私も後に文学部の教員になって、漢文講読という科目を受け持った時には、これを実践しました。

太田先生の授業では初めの十分か十五分くらい、先生が身近な学問的話題を話して下さいました。このマクラとでも言うべき話がとても面白いものでした。その時々の話題で、例えば神田喜一郎先生の『墨林閒話』が岩波から刊行されたばかりの時、その読みどころなどを紹介して下さる、というようなものでした。この授業の応用編が、土曜日

の午後にあった大学院の授業で、そこでは神田本の『白氏文集』を読んでいました。その成果が勉誠社から一九八二年二月に出た、小林芳規先生との共著『神田本白氏文集の研究』です。

私はこの授業には大学四年の時から出席したと思いますが、真面目に取り組んだかと言うと、そうとは言えない学生でした。ただ、授業が午後一時過ぎから六時頃まで続くので、三時ぐらいにいったん休憩が入ります。そのとき出席者の誰かが持ってきたお菓子をみんなで食べる。これが唯一の楽しみでした。あるとき、バームクーヘンをワンホール持ってきた人がいて、それをどう切り分けようか躊躇している。そこで、私がバームクーヘンの正しい切り方を披露しました。スイスイ適当な大きさに薄切りにしていったのですが、それを見て喜んだのが太田先生です。その後、太田先生御自身もバウムクーヘンを買って来られて、「君、また切ってくれよ」なんて仰る。それが切っ掛けになったというわけではありませんが、私は前よりも太田先生とよく話をするようになりました。話と言っても『白氏文集』の訓点がどうであるかなどということではなく、専ら食べ物の話です。太田先生は大学を卒業したばかりの昭和十七年十月に召集されて、戦地に行き、二十二年に復員しています。南方に行かれたそうですが、戦時中のことを先生は話題にされることはありませんでしたし、我々学生の方も先生に尋ねるなどということはしません



太田次男先生

でした。しかし、私との食べ物の雑談の中で、先生が懐かしそうに当時のことを話されたことがあります。南方で、海辺に近いところに椰子の木があると、兵隊たちは木に登って椰子の実を取ってくる。自分も登って椰子の実を取ってきて、それにストローのようなものを差し込んで、果汁をチューチュー飲んだが、それがとても美味しかった、というような話でした。そういう戦時中の思い出話を聞いたことがあります。

話を本筋に戻しましょう。太田先生は阿部先生と違って、新出資料を購入してそれを使って研究するということは殆ど無かったと思います。先生は御自身の幅広い人脈を頼りに、たくさんの資料を閲覧し、また写真に撮るなどして研究されていました。先生は『白氏文集』の旧鈔本の研究で有名な方ですが、その研究に着手されたのは一九六五年頃のことです。『白居易研究年報』第八号（二〇〇七年九月、勉誠出版）に「【座談会】太田次男先生を囲んで―白居易研究の過去、現在、そして未来へ―」という記事があります。そこで、先生は白居易研究に取り組んだ切っ掛けを問われて、このように発言しています。

皆さんこれ、こういうの知ってますか？　五島美術館の昭和四十年の展覧会。これは白居易を特集した展示会なんです。小松茂美さんが企画したわけですがね、このパンフレットを持っている人ももう少ないですよ。

その中でね、『新楽府』という小さい本。これが出ていた。これにどういうものか私は興味を示して、これをひとつ翻刻しようということを小松さんに言ったら、これは名古屋にあるものだけど、それじゃ返さないで自分のところに置いておくから、ひとつ私のところに来て、それを写していいですよと。小松さんが自分の部屋に置いておいてくださって、それを私はずっと上野（の東京国立博物館）まで写しに行った。これが白氏研究の始ま

りでしょう。

私が大学を出たのは昭和十七年で、その九月に卒業して、十月一日に軍隊に入ってね。……

ここのところ、非常に重要なところなんですが、座談会に御出席の先生方、どなたも突っ込まないで、話題が大学卒業時のことに移ってしまいました。もう少し根掘り葉掘り聞いて欲しかったところですね。

ここに出てくる展覧会のパンフレットというのは、一九六五年八月三十一日から十月十日まで開催された「白氏文集の古筆展」の図録のことです。そして「『新楽府』という小さい本」というのは、名古屋の真福寺蔵『新楽府略意』巻七のことです。これは『白氏文集』の巻三・巻四に収める「新楽府」五十首の注釈書で、これを著したのは鎌倉初期、信救と名乗っていた法体の人物です。つまり、これが研究の発端となって先生が発表されたのが「釋信救とその著作について―附・新楽府略意二種の翻印―」（『斯道文庫論集』第五輯、一九六七年七月）と題する論文です。

この論文は、平安末期、応保元年に『和漢朗詠集私註』という『和漢朗詠集』の注釈書を著した信阿と名乗る僧侶、それから『源平盛衰記』に木曽義仲の右筆として登場する覚明、そして、この『新楽府略意』を著した信救、この信阿・覚明・信救の三人が同一人物であることを立証した画期的な論文なんですね。しかし、この論文の見所はそれだけではありません。この論文が発表されてから十五年ほど経った頃に、国文学の方（学界）では、『和漢朗詠集』の注釈書、いわゆる「朗詠注」の研究が盛んになるのですが、この太田先生の論文はそれを先取りした観があります。大江匡房の「朗詠江註」、匡房の言談を筆録した『江談抄』、そして信阿の『和漢朗詠集私註』、これら三者の関係に先生は綿密な考察を加えているのですが、そこに用いられている資料は、当時、学界でも殆ど知られていないものばかりでし

た。ここに太田先生の幅広い人脈、未知の資料を発掘するための情報網のあったことを垣間見ることができます。そして、これらの資料は後に影印されたり、複製が作られたりしています。太田先生のこの論文がいかに先駆的なものであったかが分かると思います。

一九八〇年代に盛んになった「朗詠注」研究では、一九八二年四月に発表された黒田彰氏の論文「江談抄と朗詠江注」（『国語国文』第五十一巻第四号）が画期的で、後続の「朗詠注」研究を牽引した業績ですが、この論文も太田先生の「釋信救とその著作について」が先行研究としてあったからこそ、成り立ち得たものであろうと思います。

書入れ詳密な南家本『和漢朗詠集』の古写本、これは京都の坂内義雄さんという方がお持ちだったものですが、これは一九七五年に複製されました（複刻日本古典文学館『和漢朗詠集』、一九七五年四月、日本古典文学刊行会）。また、天理図書館の安倍直明書写本も杤尾武先生が影印・翻字をされました（『〈貞和本〉和漢朗詠集〈附漢字総索引 和歌用語索引〉』、一九九三年、臨川書店）。こうして「朗詠注」関連の資料が公開され、研究の環境が調えられたわけですが、その切っ掛けとなったのが太田先生の「釋信救とその著作について」でした。

さて、太田先生が『白氏文集』の旧鈔本研究の一環として、金沢文庫本の調査に当たられたことは先に述べました。その最終的な研究成果は、一九九七年二月に勉誠出版から出された『〈旧鈔本を中心とする〉白氏文集本文の研究』の上巻に収める「金沢文庫本白氏文集」にまとめられています。その中で太田先生は金沢文庫本の現存巻を次のように整理しています。

（一）同じ金沢文庫本という鈔本ではあるが二種に分けられる。

金沢文庫本には鎌倉時代の寛喜三年（一二三一）から建長四年（一二五一）の二十年をかけて、豊原奉重による校訂作業（全巻、この人単独の作業である）の加えられている鎌倉鈔本と、奉重とは何らの関係もなく、〔平安末～鎌倉初期頃〕写本（以下、「別本」と称す）との二種類がある。いま、これを所蔵者別に区分すれば次の通りである。

〔奉重校訂本〕

大東急記念文庫蔵　巻六・九・十二・十七・二十一・二十二・二十四・二十八・三十一・三十八・三十九・四十一・四十七・五十二・五十四・六十二・六十三・六十五・六十八

天理図書館蔵　巻三十三

田中穣氏旧蔵　巻十四・五十九

保阪潤治氏旧蔵　巻四十

存否不明の巻　巻四十四・六十一

〔別本〕

田中穣氏旧蔵　巻八・三十五・四十九

三井高堅氏旧蔵　巻二十三・三十八

白鶴美術館蔵　巻六（断簡）

尚、白鶴美術館蔵本は巻六断簡一葉に金沢文庫蔵書印が捺される。従来この一葉（作品番号0229）のみが知られたが、その後、次の作品番号（0244, 0248, 0252, 0257, 0274, 0276）の六葉が見出され、五島美術館主催白氏文

集古筆展（昭和四十年九月）に展示された。同じ時展示された巻五十七断簡（2723, 2727, 2728, 2729, 2766, 2767, 2768）三葉は首葉を欠き、文庫印の存否は不詳であるが、筆致等よりみて、これも金沢文庫本である可能性がある。何れも『展観目録』に収む。

別本は各巻とも訓点、書入等は施されているが、写真や図版によれば識語は認められない。また、各巻本文は夫々別筆である。

田中氏蔵本は、すべて、現在、文化庁（国立歴史民俗博物館）に所蔵されている。

以上の三十二巻（二巻の重複を含む）が金沢文庫本『白氏文集』として太田先生が認定したものです。

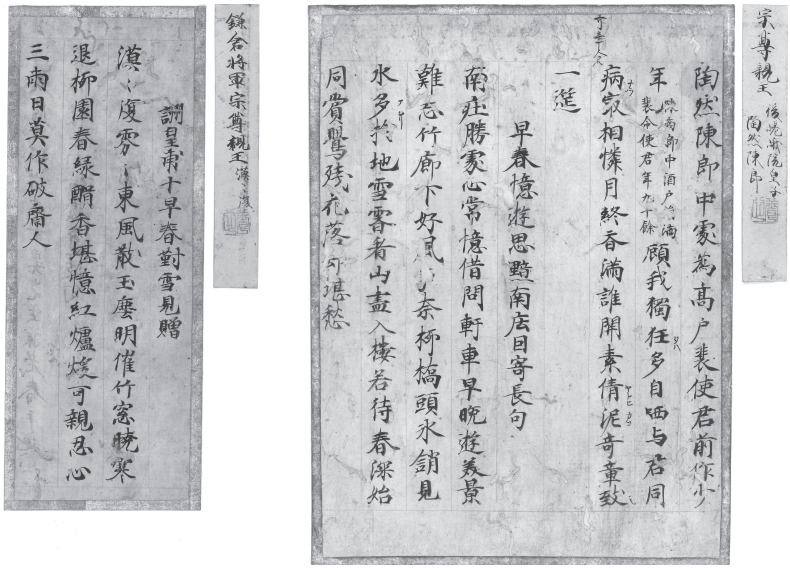
豊原奉重（ともしげ）の校訂の加えられた鎌倉中期写本と、それとは異なる平安時代書写の別本とに分類されています。存否不明とされている巻四十四と巻六十一とは、那波本などに書入れの形でその存在が知られるもので、奉重の奥書も移写されているものです。つまり、これらは、今は書入れの形でしか見られないけれども、将来その現物がひょっこり現れる可能性があるものです。別本の最後に「白鶴美術館蔵巻六（断簡）」とあるのは、手鑑に押されている古筆切のことで、古筆切は巻六のほかに巻五十七もある。太田先生は記していませんが、巻六の古筆切も巻五十七の古筆切も宗尊親王を筆者とする極札が付いています。宗尊親王（一二四二―一二七四）は後嵯峨天皇の第一皇子で、鎌倉幕府第六代将軍となった鎌倉中期の人物です。宗尊親王の極札の付いている古筆切は要注意で、鎌倉中期を遙かに遡った平安時代の筆蹟のものであることが多い。この『白氏文集』の古筆切も平安写本で、「熊野切」と命名されている名物切です。これらの古筆切の書影は小松茂美氏の『古筆切大成』に見ることができます。

太田先生は現存が確認できないが、嘗て確かに存在した巻（巻四十四と巻六十一）、古筆切として残存する巻（巻六と巻五十七）も含めて、金沢文庫本の現状を示されました。また、金沢文庫本と言われているけれども、そうとは考えられない写本は、このリストに載せていません。例えば大東急記念文庫所蔵の巻三・巻四ですね。これは金沢文庫本ではないと判断されたわけです。ともかく先生は、自分はここまで金沢文庫本を突き止めたから、これを基にして、後は君たちが補ってくれと、そういう気持ちを籠めて、このリストを作成されたように思われます。これは私の勝手な解釈かもしれませんが、そのように思われてならない。

実は昨年（二〇一九年）、私は新たに金沢文庫本らしき巻六十七の断簡を見付けました。別本の巻六、巻五十七断簡がどちらも筆者を宗尊親王とする極札が付属していることは先ほど申しましたが、新出の巻六十七断簡にも、同じく宗尊親王の極札が付けられています。そればかりか、筆蹟は巻五十七の筆蹟によく似ています。もし太田先生がこれを見たならば、金沢文庫本と認定されただろうと思います。これまでに四葉の断簡を見付けました。その内の二葉を書影4に示しました。まだ出て来ると思います。

おわりに

以上、阿部先生、太田先生の斯道文庫に於ける研究活動についてお話ししました。新出資料、未知の資料を博捜することによって、その分野の本文研究を進展させていたことがお分かりいただけたかと思います。その根底には、必ず資料の原本に当たるという固い信念がありました。これは今後の斯道文庫の活動に於いても重視され、継承されるべき姿勢です。



書影4　『白氏文集』巻六十七断簡 佐藤架蔵本

但し、新出資料、或いは未公開資料を扱う場合、思わぬトラブルに巻き込まれることがあります。この点には注意を払う必要があります。それはともかく、このあと休憩を挟んで四本の研究発表がありますが、どの発表も、今申しました原本に当たってものを言うという姿勢で貫かれています。どうぞじっくりと聞いていただきたいと思います。これで私の話は終わりです。御清聴ありがとうございました。